




Hなママと何度でも



学校で虐められてたのを切っ掛けに二十歳をこえても未だに家で引きこもりをしている僕。

そんな僕を女手一つで育ててくれたママ。

片親の寂しさも感じさせないぐらい僕に愛情を注いでくれた。

……そんなママを僕は自分の感情のままに押し倒し犯した。



今の僕の現状もそれを許しているママも何もかも気に入らなかつた

自分が今のようになったのも全てただ甘やかすだけ甘やかしてきたママのせいだと。

そして言いがかりに等しいそれをぶつけ実の母を犯してしまつたのだ。

ママは荒い呼吸で胸を上下に動かし、その膣口からはゴポリと精液が溢れ出る。
その惨状に自分がしてしまったことを嫌でも自覚させられる。





「はあ…はあ…ぼく、ちゃん」

ママの自分を呼ぶ声に事の重大さに怖くなり
僕は自分の部屋へと逃げ出してしまった。

「……ほら、僕ちゃん起きなさい。もう、いつまでも寝てたらお昼になっちゃうわよ」

まるで昨日のことがなかったかのように接し、いつもど通りの笑顔で僕を起に来てくれたママ。



もしかしたら昨日のことは夢だったのではと都合のいいことを考えてしまいが、汗や汁で汚れてしまった昨日のままの自分の服がアレは現実だったと教えてくれる。



「マ、ママ何で……」

「何でそんな普通にされてられるんだよ！」

僕はママにあんなひどいことしたのに！」

僕はママに当り散らすように叫ぶがママはそんな僕を優しく抱きしめてくれる。



「……そっか。昨日の事、気にしてずっとお部屋にこもってたのね」

「別にいいのよ♥それで僕ちゃんの気が済むのならママがなんだって受け入れてあげる♥」

「ほら、いらっしやい僕ちゃん♥ママが慰めてあげる♥」





「ママのおっぱい美味しい? 必死に吸い付いてきて
甘えん坊さんなんだから♡」

「ん、ちゅ、ちゅる♡ちゅぶ♡」

ほおほお♡

ぞく♡
ぞく♡

むん♡

ちゅぶ♡

むん♡



「あんっ♡乳首そんなに舌でコロコロしちゃだめえ♡」

「んく、ちゅ、れろ♡ママのおっぱい好きっ。柔らかくて気持ちいい……っ」

ぞく♡
ぞく♡

むん♡

じゅ♡

ちゅ♡

ほ♡
ほ♡



「あ…っ♡ママのおっぱい吸って興奮しちゃった？
僕ちゃんのおちんちんすっごいカチカチになっちゃ
ってるよ♡ふふ♡ママがシヨシヨしてあげるね♡」



ほおほお♡

ぞくぞく♡

「…っ♡あぁ…っ♡」

「ジロジロマジマジロマがんぼつららおつらつら
ビュッおうね♡」

ジロジロ♡

おん♡

おん♡

おん♡



(ママのおっぱい吸いながら甘やかされて…っ)

(や、やばい…っ！「これ気持ちよすぎて頭とろけ
そう…っっっ(♥)

ほおほお♡

ぞくぞく♡

シクシク♡

むん♡

じゅわ♡

ちゅ♡



「先っぽからお汁が出てきてヌルヌルしてきた♡
ママの手で気持ちよくなってくれたんだ♡」

「あ、ああ…っ♡まままあ♡」

ぞくぞく♡

シコシコ♡

むん♡

じゅわん♡

ちゅん♡

ほおほお♡



「僕ちゃんのお汁でママの手ニユルニユルになっちゃったよ♡」

「んっ♡すごい硬い♡何だかママもドキドキしてきちゃった♡」

シコシコ♡

ぞく♡ぞく♡

ちゅ♡ちゅ♡

ちゅ♡ちゅ♡

ちゅ♡ちゅ♡

ほ♡ほ♡



「あはっ♡手の中でおちんちんがビクビクするの
伝わってくる♡こんなにあっついのが入れられた
らママどっになっちゃうんだらう♡」

ほおほお♡

ぞくぞく♡

シコシコ♡

むん♡

じゅん♡

ちゅん♡



「ああ…っ♡ママ、僕、もう出ちゃうっ♡」

「♡ママの♡手で♡して♡出して♡」

ぞく♡ぞく♡

ほあ♡ほあ♡

♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡



はぁはぁ♡

ぞくぞく♡

ちゅぽ♡

じゅぽ♡

ちゅぽ♡

デュルル〜♡

「わっ♡すっ!」いっぱい出る♡あっついのがママの手の中から溢れちゃったあ♡

く〜♡



「べとべとのおちんちんママのお口で綺麗にしてあげるね♡」

「♡……ママ……あ、あ」

いったばかりのチンコにママの舌が淫猥に
纏わりつき、出したばかりだというのに先程
よりも硬くそそり勃ってしまう。





「んっ、ちゅぶ、れるっ…っ♡んちゅ♡じゅぶ♡
じゅるるっ♡」

「んぶ♡僕ちゃんのおちんちんおいしい♡」



ママが自分から僕のモノを啜ってる姿にゾクゾクとしたものが背筋に走る。

本来ならあってはいけない光景のはずなのに……。いや……だからこそ僕はこんなに興奮しているのだろう。



「おちんちんお掃除しているのにどんどんお汁
が出てくる♥ママで感じてくれてるんだ♥」

ちゅっ♥じゅっ♥ちゅっ♥あむっ♥

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡



「だ、だってママの口気持ちよすぎて…っ」

「ふふ♡うれし♡それじゃあママがもっとしてあげるね♡」

♡みみ♡

♡っ♡

♡ち♡ぽ♡♡



「あ♡口の中でピクピクしてきたあ♡もう出ち
やいそうなの？」

「めんママ、僕もう…っ♡」

「ん♡いいいよママママのお口に僕ちゃんのプリ
プリ精子いっぱい出してえ♡」



「あぁ♡入っちゃったあ♡僕ちゃんがママの中に戻って来てる♡あ♡あ♡あ♡気持ちいい♡僕ちゃんはどう？ママの中気持ちいい？」

「うん、ママの中あったかくて気持ちいい♡」

膣肉が逃がさないとばかりに絡み付いて来る。
あまりの気持ちよさに出し入れする度に腰が
抜けそうになる。

こんな快楽を覚えてしまったら、もう自分で処理
することなんて出来なくなってしまう。



「ふふ♥凄いい気持ちよさそう♥したくなったらいつでもママがしてあげるからね♥」

「う、うん」

顔に出てしまっていたのだろうか。

まるで心を読まれたかのようなタイミンクの良さにドキリとしてしまう。

ああっ♥

はぁはぁ♥

ムン...

ぐい...

ずっ♥

ずっ♥





別の生き物のように絡みつくママの膣内。
気を抜くと一気にイッてしまいそうになるのを
我慢し、僕は負けじと必死に腰を振りチンコを
押し付ける。



「ひうっ♡あぁっ♡奥に来てる♡コッコッって叩か
れてる♡あんもっもっといっぱい突いてえ♡ママの
中で気持ちよくなってる♡」

「僕のチンコで感じてくれてるママの顔可愛いよ」

「だって♡だってホントは欲しかったの♡だから
もっと♡もっと♡ママと一緒に気持ちよくなっ
て♡」

あぁ♡♡

あぁ♡♡

ママ♡♡





ああっ♡

♡♡♡♡♡

ああっ♡

「僕ちゃんのおちんちんママの中で擦れて…っ♡
ひゃうっ♡♡子宮が喜んじやって降りて来ちゃった♡
だしてえ♡ママの中に出して一緒にイこう♡」

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ



「ママっ...中っっ...ママの子宮に中出しするんが...」

「うん、出して♪僕ちゃん精液でママの子宮いっぱいにしてえ♥」

H&H♥

ああっ♥

ムリッ...

ズッ...



ママと結ばれたあの日以降、僕はタガが外れた
かのようにママとの淫れた日々を送っていた。
僕は後ろから抱き着くと服の中に手を入れ
ママの大きな胸を堪能する。



「あん♡僕ちゃん急に抱き着いたら危ないわよ♡」

「♡ママ♡ママ♡」

「ひうっ♡そんなに必死に求められたらママ感じちゃうよ♡」

「♡ママ...♡」

「ママ...」

「ママ...」

「あ♡♡」

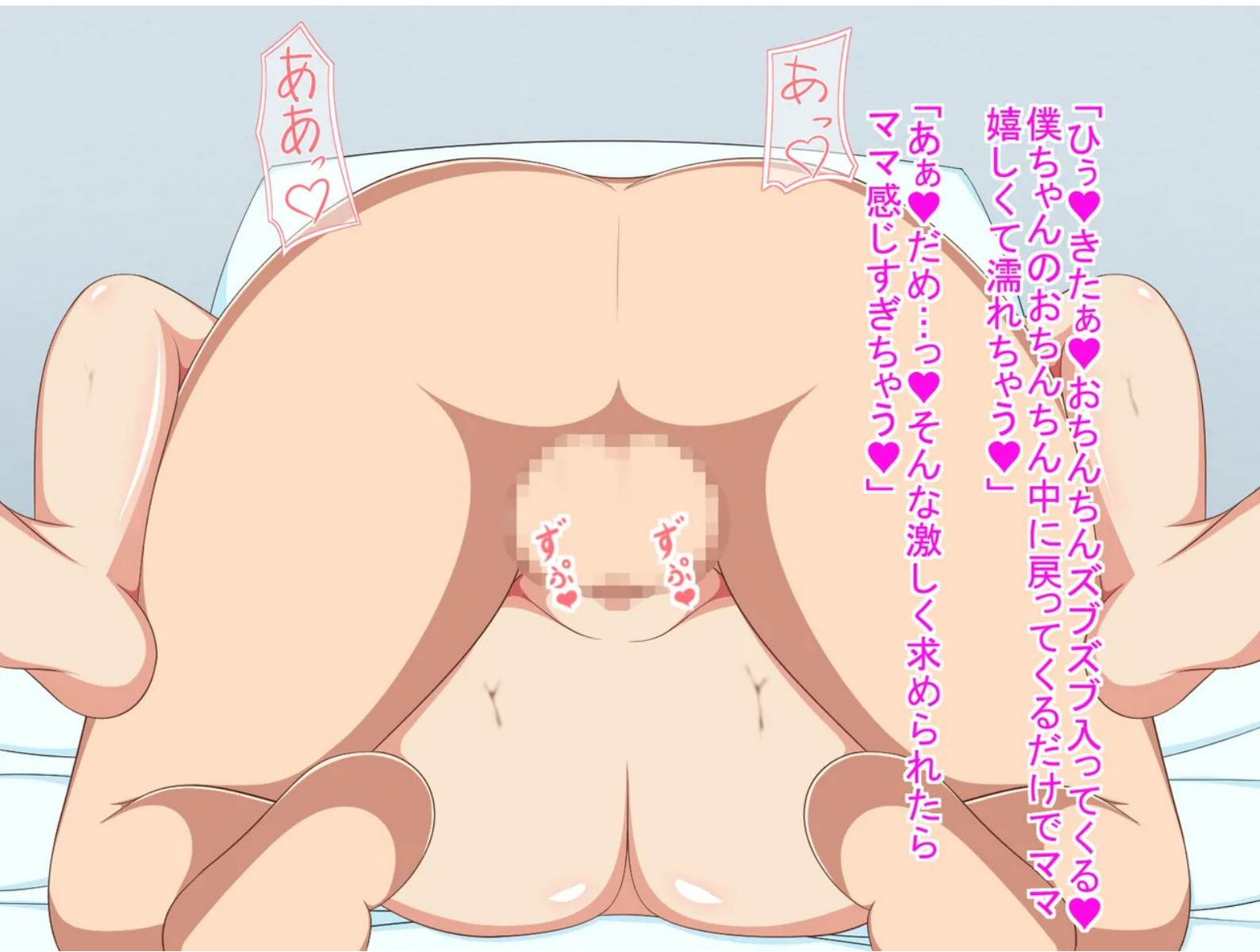
「あ♡♡♡」

吸い付くような柔らかかな胸を揉みしだき、発情した動物のように勃起したチンコをママのお尻に擦り付ける。

『もう、そんなにながつつかなくてもママならいつでも受け入れてあげるのに♪』

『ほら、いらっしやい♥ママとラブラブ交尾しましょうね♥』





ああっ♡

あ♡

「ひう♡きたあ♡おちんちんズブズブ入ってくる♡
僕ちゃんのおちんちん中に戻ってくるだけでママ
嬉しくて濡れちゃう♡」

「ああ♡だめ…っ♡そんな激しく求められたら
ママ感じすぎちゃう♡」

ずぶ♡

ずぶ♡



「っ！そんなこと言ったってママのおまんこ中、
入れただけで蕩けそうになるくらいすっごい気持
ちよくて腰止まらないよ！」

「っ！膣内熱くてチンコ溶けちゃいそう！」

「いいっ、いいのお♪息子のおちんちん気持ちいいのお♪太くて、熱いおちんちん。ゴツゴツしたのが中挟って来てるのお♡」

おおま♡

ずぶ♡
ずぶ♡



「はあ……♡はあ……♡うあ♡おちんちん中で膨らんできたあ♡中で熱いのがビクンビクンしてる♡」

僕のチンコで喘ぐママの妖艶な顔。

あの優しかったママを自分のイチモツで喘がせてる事に興奮を抑えきれず激しく腰を振る。

あぁ♡

ずが♡
ずが♡



「あっ♡ああっ♡奥にコツンコツンって当たってる♡ママの子宮にただいまって入って来たがつてる♡」

「ママっ…ママの一番奥で僕の精液全部出すからねっ！」

「うん♡だしてえ♡ママを僕ちやんで満たして♡」

ずが♡
ずが♡

ああっ♡





おおほっ♡

「おおほっ♡射精止まらない……っ♡ああっ♡
中あ入ってえ……っ♡精子がママの中でビチビチ
泳いでりゅ♡」

びちゃ♡
しゅっ♡
ちゅほ♡
びゅ♡



ははは
あはは
♡

「僕ちゃん舌だして。ママがお口の中気持ちよくしてあげる♡」

僕は言われるがままに舌を出してママに身をゆだねる。口内に侵入してきた舌がクチュクチュと僕の舌を絡め撮る。

ママの舌はまるで別の生き物のように口の中を犯していき思考を徐々に奪われる。

はぁ
はぁ♡





はははは
♡

「んちゅっ♡れるっ♡じゅる♡あむっ♡ちゅっ♡
あむっ♡んっ♡ちゅぶっ♡ぢゅるるっ♡♡♡♡♡
♡はあ♡…はあ♡もっとお♡」

ちゅっ♡
♡ちゅっ



ママの♡おっぱい♡

♡おっぱい♡
♡おっぱい♡

「うあああ…っ…ママのペロちゅー気持ちいい♡」

「んっ…♡じゅっ♡じゅっ♡んっ♡ちゅるる…♡ちゅるる♡」



「あは♡勃起おちんちんお腹に押し付けられ
ちやつてる♡ママのベロちゅーでこんなにして
くれたんだ♡」

ははは♡

「…………うん、気持ちよすぎて、ちんこ」ガチガチに
なっちゃった」

「あは♥す♥い元気♥ママの子宮の辺りグリグリ
されちゃってる♥」

は
あ
は
あ
♥





ははは♡

「そんなに早くママとしたいんだ♡…いいよ♡
エッチしようか♡僕ちゃんのおちんちんママの
中で受け入れてあげる♡」



はあ
はあ♡

ズブズブ...

「はあ♡はあ♡やっぱり僕ちゃんがママの中間に戻って来てくれるこの瞬間すきい♡」

他人には見せない。僕しか知らないママの発情しきった顔と喘ぎ声。

自分だけがそれを知っていると思うと嬉しくてより一層ママを感じさせられるように円を描くように腰を振る。

ジュージューといやらしい音を立てながらチンコがママのまんこを抉る度愛液が飛び散る。



はぁはぁ♡

ちゅぽ♡
しゅぽ♡



はあはあ♡

「んくっ♡おちんちん中で暴れて…っ♡
あっ♡あっ♡ふかい♡ふかいのお♡おちんちん
一番、深いところまで来てえ♡」



ああっ♡

はあはあ♡

「あっ♡息子精子が欲しいって子宮降りて来ちゃったあ♡ああ♡どうしよう、だめなのに排卵しちゃってる♡やあ♡そんなに早く腰振らないでえ♡」

ず♡ふ♡



ああっ♡

はあはあ♡

ああ♡

「あっ、だめえ！今だされたら赤ちゃんが…っ♡」

「だってママのまんこ気持ちよすぎて止まらないんだもん。いいよね」のまま中に出しちゃっても」



ああっ♡

はあはあ♡

ああ♡

ひゅん♡

ひゅん♡

♡

♡んんんんんんんんんんんん♡



「っ！ママの子宮が吸い付いてっ！っ！搾り取られるっ！」

「……もう、僕ちゃん強引なんだから」

あぁ♡

はぁはぁ♡

あぁ♡

ひゃ♡

ひゃ♡



ママの大きく開けられた口に容赦なくイチモツ
を突き入れる。ママは苦しそうにするもすぐに僕
のチンコをしゃぶりだした。

上目遣いで僕を見るママの顔を見ていたら我慢
出来ず頭を押さえ付け自分から腰を振ってしまふ。

ちゅぽ♡

じゅぽ♡

激しくしすぎてママはより一層苦しそうに
えづくもそれでもどこか恍惚とした顔で僕
のものを受け入れ自分からより深く啜え込む。





はあ
あみ
♡

「んっ……じゅっ。じゅっ。ぬるっ♡僕ちゃん、出したい
時はいつでも言ってるね♡ママのお口の中で
精液が、ジュッ、ジュッ、出ていいからね♡」

ママは何かを期待するかののような目で僕を見上げるてくる。

先程言ったとおり本当にいつでも出して良い
と言うことなだろう。

僕はママの期待に応えるようにさらに動きを早
め喉奥に叩きつけるように射精する。

はあ
はあ
♡

じゅ
ぽん♡

ちゅ
ぽん♡





「んっっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅるるっ♡んくっ♡
「んくっ♡」

「お口火傷しちゃいそうなぐらいあつつい精液
いっぱい出せたね♡こんなに出されたらママの
お口妊娠しちゃいそう♡」

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡

んっ♡
んっ♡
♡





「ふふ、おちんちんまだ元気だけど汚れちゃったから一緒に風呂入るっか♥」

「あっ、僕ちゃんそんな急に♡」

先程のフェエラで既に感じていたのか何の抵抗もなく僕のイチモツはママの膣内へと進入する。ピチャ。ピチャと愛液が飛び散るが風呂なので遠慮なく腰を振る。





「あっ♡ああっ♡そんな後ろから腰強く振っちゃだめえ.....っ♡ひぐっ♡ママ僕ちゃんに犯されてるみたいで感じちゃうの♡」



僕の動きに合わせてるように腰をうねらせ、膣内を抜き差しするたびママの膣肉は嬉しそうに僕のイチモツに絡みつく。



(…っ！相変わらず凄いな。ヒダの「っ」っが絡み付いてチンコ気持ちよすぎっ！)

すぐにもイってしまいたいのを我慢し少しでもママを気持ち良くさせる為に必死に腰を振る。

だが徐々に迫る快楽の波に限界が近づいてくる。

「ママっ…僕もっっ…」

「いいよ出して♡ワシちゃんみたいに僕ちゃんの
精液でママの中をマーキングしてえ♡」

ずか
ずか

♡ハハ…♡

ビュッ…

…いっ…

ほあ
ほあ♡

ほっ♡♡





「あ♥おちんちんまた硬くなってきたあ♥」
「僕ちゃんの感じている顔可愛い♥おっぱいでムニムニされて気持ちいいんだあ♥」

はあはあ♥

ムニムニ...

ぐいぐい...

ムニムニ♥



「あん♥おっぱいの中でビクビク脈打ってる♥
「こんなに熱かったらおっぱい火傷しちゃいそ〜♪」

ほめほめ♥

ぐいぐい...

ぐいぐい...

ぐいぐい♥

手馴れたような胸の動かし方に、もしかしたら僕以外にも…そう例えば父さんなんかにもしていたのだろうかと思ひ聞いてしまった。

「……ママ、こういう事父さんにもしてあげたの？」





顔も知らない父さん。

そんな奴が僕のママのおっぱいを好きにしていた
のかもしれない。

そう考えただけでムカムカとしたものが僕の心に
湧き上がる。

はぁはぁ♡

ぐいぐい...

ぐいぐい...

ぐいぐい♡



「ん？僕ちゃん以外にしたことなんてないわよ」

「ふふ♡もしかして嫉妬しちゃった？大丈夫よ♡
ママは僕ちゃんだけのものだから♡ほら、気持ち
いいでしょ♡」



「ああっ♥♥やばい…っ♥♥おっぱい柔らかくて気持ちいい…っ♥♥そんなにされたらもう、でちゃう…っ」

ははは♡

ちゅっ

ちゅっ

ぐいっ…

ぐいっ…

♡…♡…♡



「あは♥おちんちんビクビクして可愛い♥
いっぱい気持ち良くなっておっぱいにビュッビュッ
っでしていいからね♥」

はみはみ♥

ぐいぐい...

...ぐいぐい

はみはみ♥



はみはみ♡

ひゅる♡

ひゅー♡

♡

「あ、あああ……っ♡」

びゅるるるっ♡



ははは♡

♡…♡…♡

♡…♡…♡

「こんなにいっぱいビュッビュッしてママのおっぱい
そんなに気持ちよかったんだ♡」

「うあ…ママ、ママ」

「ふふ♡まだこんなにおっきいね♡それじゃあ、
お風呂あがったらまたママのなかで気持ち良くなろうね♡」

「ひうっ♡ど、どうしたの僕ちゃん。エッチなら
お部屋についてから……っ♡」

僕は何かを言うママを無視しトロトロに濡れそぼ
った腔内に自分のイチモツを押し付け強引に挿入
する。

ずが♡
ずが♡

はあ
はあ♡

あ♡
♡



「だだめよ僕ちゃん。こんなところでエッチしてたら風引いちや…っ♡ひぐっ♡い、いつもより激しい♡」

僕は胸の内に沸いたモヤモヤとしたものをぶっけるように乱暴に腰を打ちつける。
ずがずが

ああ♡♡

はあはあ♡



「ひぐっ♥すい♥奥ぐりぐりってされるのいい♥」

「ママの子宮チンコに吸い付いて離さないよ。やっぱり僕のチンコが一番好きなんだよね？」

「うん♥好きなの♥僕ちゃんのガチガチおちんちん
だいすき♥」

あひっ♥

はあはあ



「そんなに好きならイけっ！アクメしろっ！イキまくれっ！僕のチンコだけで、僕の精液だけでイキまくれっ！」

「だしてえ♥僕ちゃんの精液が欲しいってママの子宮疼いて仕方ないの♥」

ずが

あっ♥

はあはあ♥



僕は父に関するものが何かないかと探し回った。
最初はただの嫉妬心だった。

僕以外にママを抱いた男。

そのことが頭から離れず、どんな顔をした奴だったのか見てみたくなったのだ。

だが家には僕とママの写真しかない。

父さんや他の親戚が写っているものは何もないのだ。

それが余計に僕の父さんに対する興味を強めた。

ママは父さんのことを聞いても笑って誤魔化すだけで何も教えてくれない。

だがそれでも父さんの事を知りたくなった僕はママの部屋に忍び込んで何か父さんに繋がる物がないかと部屋の中を探し回った。

そして押入れの奥にしまっていたラベルに日付だけが書かれたDVDを見つけた。

日付は三十年も前の物だった。

：ママの物だろうか？僕は興味本位にパソコンで動画を再生する。



● REC

「ああ♥すぐっ♥私の中でおちんちんがビクン
ビクン暴れてるっ♥」

「ああっ♥奥までゴリゴリっって抉じ開けられて
るっ♥いいっ♥気持ちいいの♥」

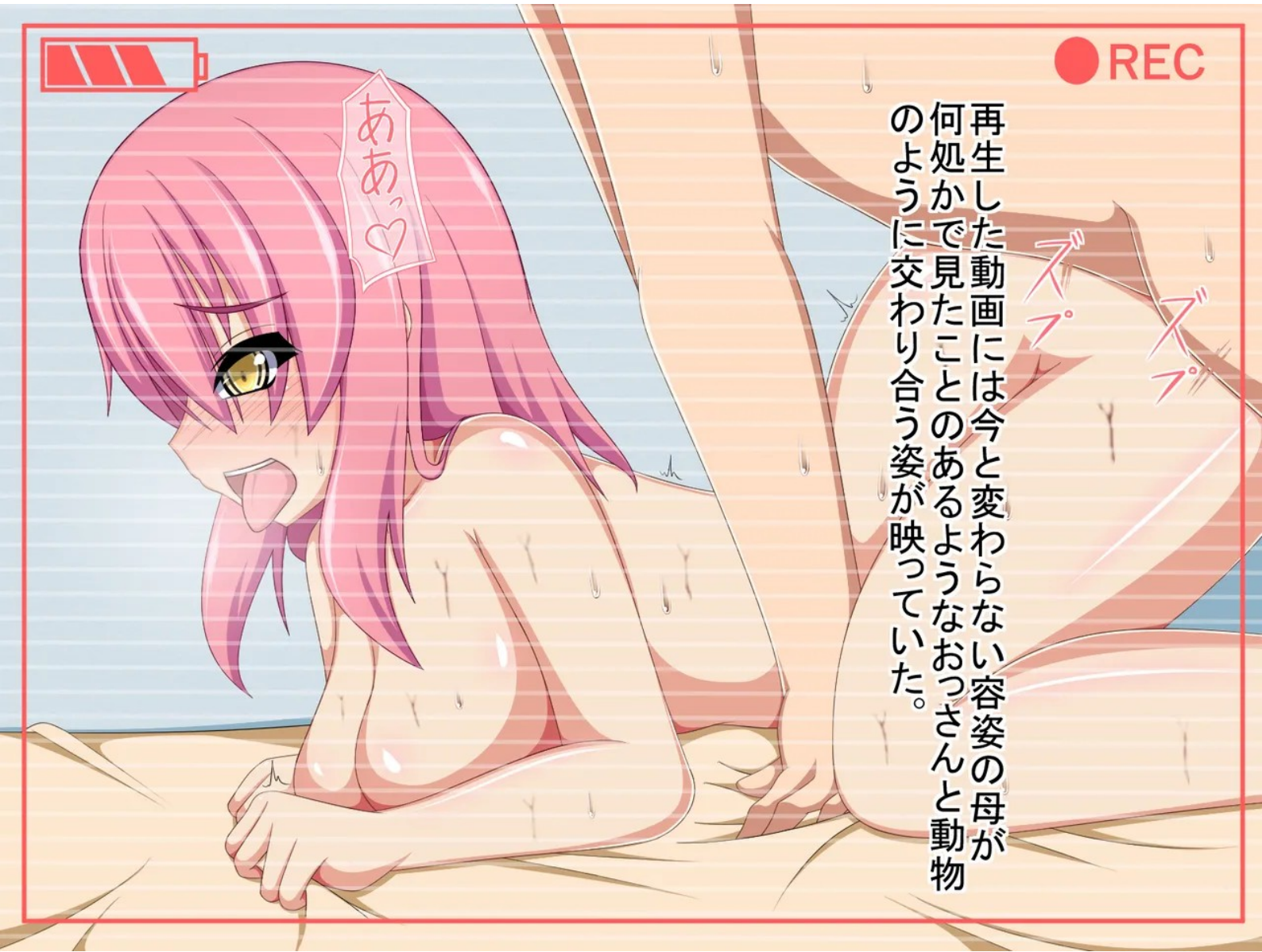
あっ♥



● REC

再生した動画には今と変わらない容姿の母が
何処かで見えたことのあるようなおっさんと動物
のように交わり合う姿が映っていた。

あぁっ♡



● REC

画面に映っているママは僕にだけ向けていてくれたトロトロに発情しきった顔を僕以外の誰かに向けていた

ああっ♡



● REC

「あ、あぁっあ♡後ろから犬みたいにされてるの
に私喜んじゃってる♡」

「もっと♡もっと突いてえ♡オマンコ貴方のおちん
ぽにぴったりになるようにしてっ♡おちんぽの形
覚えて戻らなくなるようにしてえ♡」

あひ♡♡



● REC

「っ…出すぞっ…中に出すからなっ！」

「うん♥だしてえ♥なかに♥子宮の奥に欲しい
のお♥」

あひ♥



REC

……動画の再生は終わった。

だが僕は動画の内容に分けがわからず立ち上がる
ることが出来なくなっていた。

エロ……♡

ああ♡♡



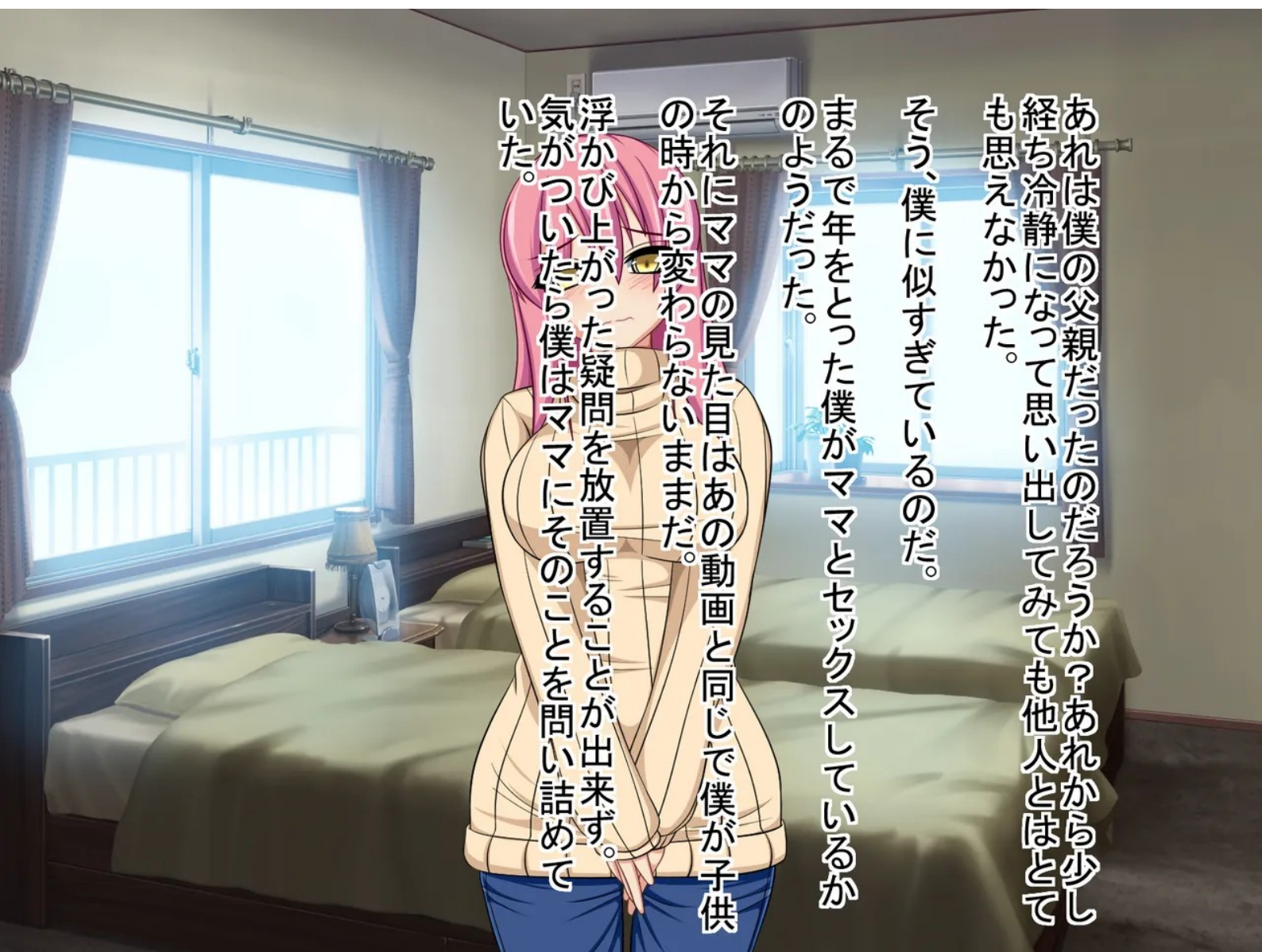
あれは僕の父親だったのだろうか？あれから少し
経ち冷静になって思い出ししてみても他人とほとと
も思えなかった。

そう、僕に似すぎているのだ。

まるで年をとった僕がママとセックスしているか
のようだった。

それにママの見た目はあの動画と同じで僕が子供
の時から変わらないままだ。

浮かび上がった疑問を放置することが出来ず。
気がついたら僕はママにそのことを問い詰めて
いた。



「ママはいったい何なの？あのDVDといい僕
もう分けがわからないよ」

「……そっか、見つけちゃったか」

ママの姿がブレたかと思うと、まるで漫画や
ゲームに出てくる女悪魔のような姿になる。
呆然とする僕にママは普段とは比べ物になら
ない力でベットに押し倒す。





「ふふ♡あれを見て嫉妬しちゃった？大丈夫だよ
前も言ったでしょ♡ママはずっと昔から僕ちや
んだけのモノなんだから♡」

はあはあ♡

♡いっしょ♡

たぶ たぶ

たぶ たぶ



何かとてつもなくまずい気がする。
理性が逃げなくてはと警告するのに本能がそれを拒否するかのように体が動いてくれないのだ。

「…ママ…ママ…」

「大丈夫。何も怖がらなくていいんだよ♡ママはずっと僕ちゃんだけの味方だから♡」

「だからママの中で嫌なこと全部忘れて、また最初からやり直そうね♪」

はぁ♡はぁ♡♡

たぶ♡
たぶ♡

ちゅ♡
ちゅ♡



「ま、また？」

「そっだよ。最初の僕ちゃんがママが自分以外を愛しちゃうのが嫌だっけって言って嫉妬しちゃったから、僕ちゃんだけをずっと愛してあげられるように産みなおしてあげることにしたの♡」

はあ
はあ♡

たぶ
たぶ

ちゅ
ちゅ

ちゅ
ちゅ



「ちよつと怖いかもしれないけど大丈夫だよ♡
ママがずつと僕ちゃんを守ってあげる♡だから
あなたは何も心配しないでママに甘え続けて
いいんだからね♡」

はぁ♡はぁ♡

ニャー♡

たぶ♡
たぶ♡

ずわ♡
ずわ♡

「だから全部出しちゃって♡僕ちゃんの全部ママの
中に戻っておいで♡」



「あ、ああ……っ♡あああ……っ♡」

射精すると同時に徐々に意識が暗くなる。

まるで自分が溶けていくかのような感覚。
だがそこには恐怖はなかった。ただひたすらに
安堵感だけがあった。

はぁ
はぁ♡

たぶ
たぶ

♡
♡

♡
♡





「お帰りなさい……♡」



真つ暗な空間で暖かい何かに包み込まれている。
ただひたすらに安らげる空間。

ここでは何も考える必要もなく、僕の意識は溶けていく。



「あ、動いた♡ママの中に戻ってこれてそんなに
嬉しいんだ♡ふふ、ママが何回でも僕ちゃん産ん
であげるからね♡」

「だからまた、いっぱい、いっぱい、愛し合おうね♪」









































































































































































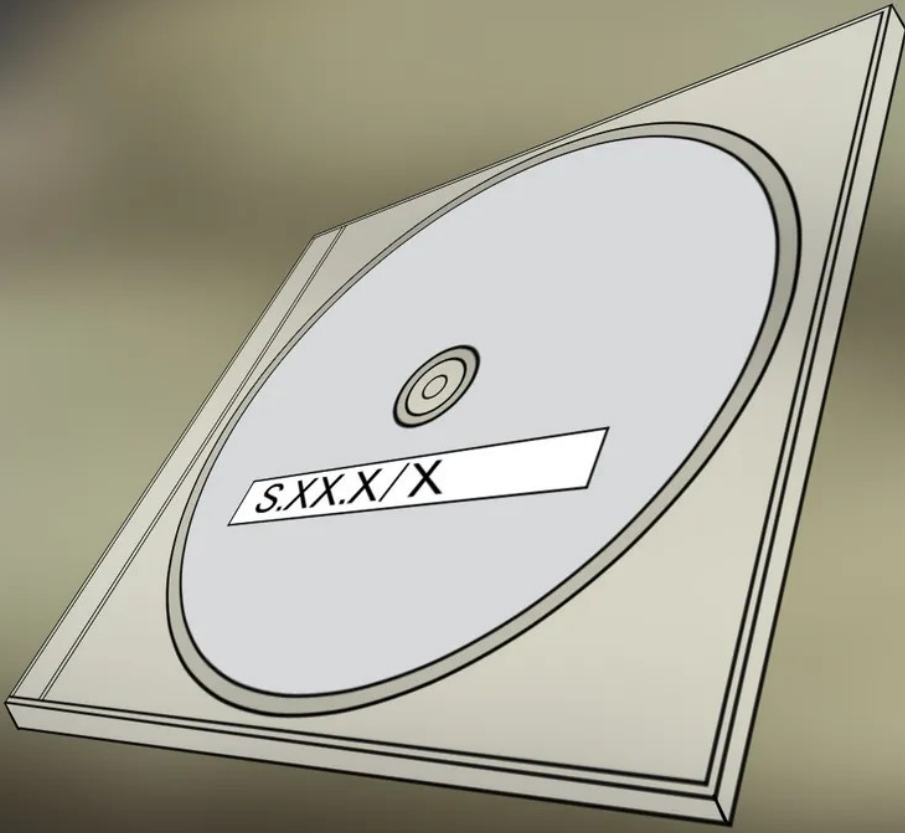






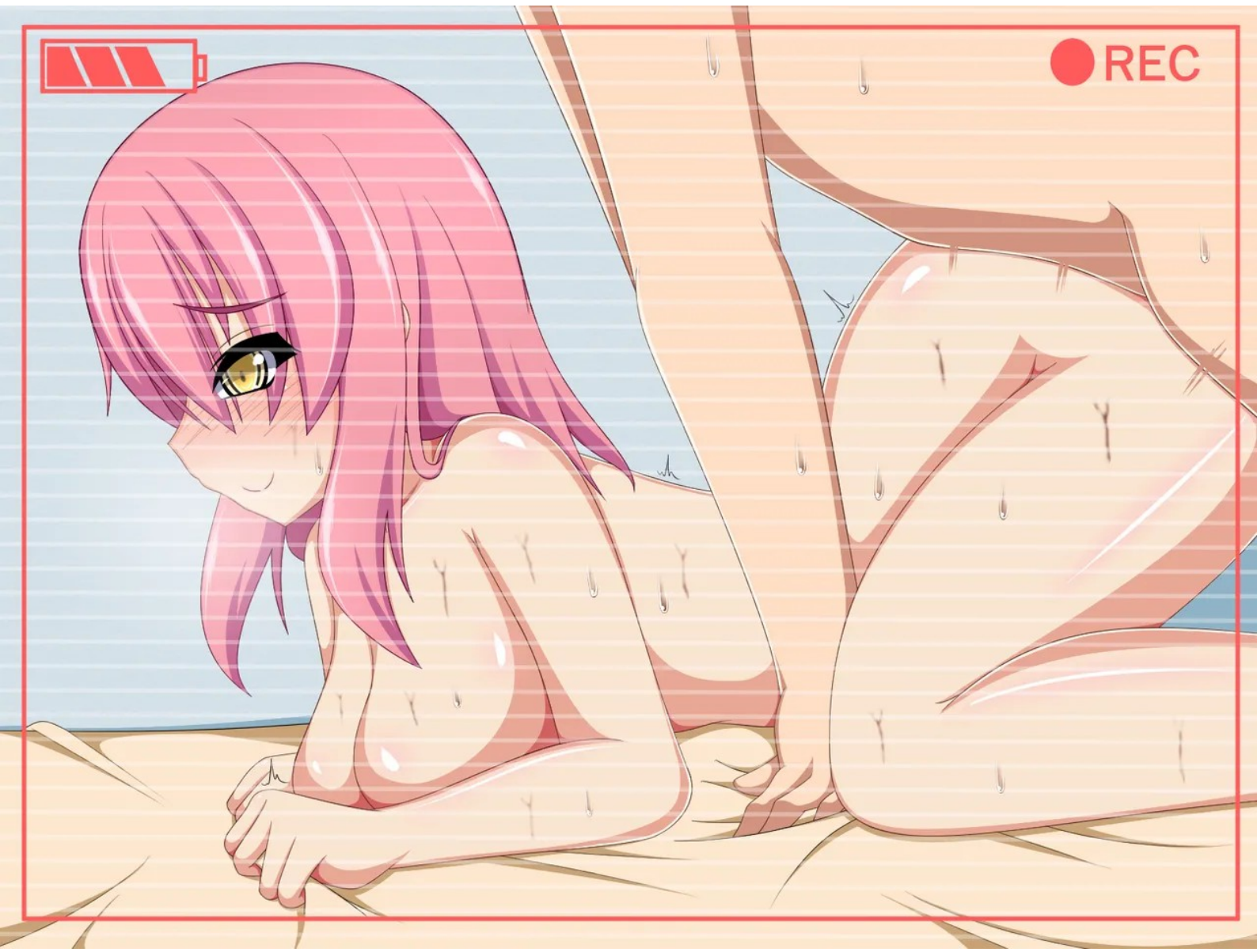






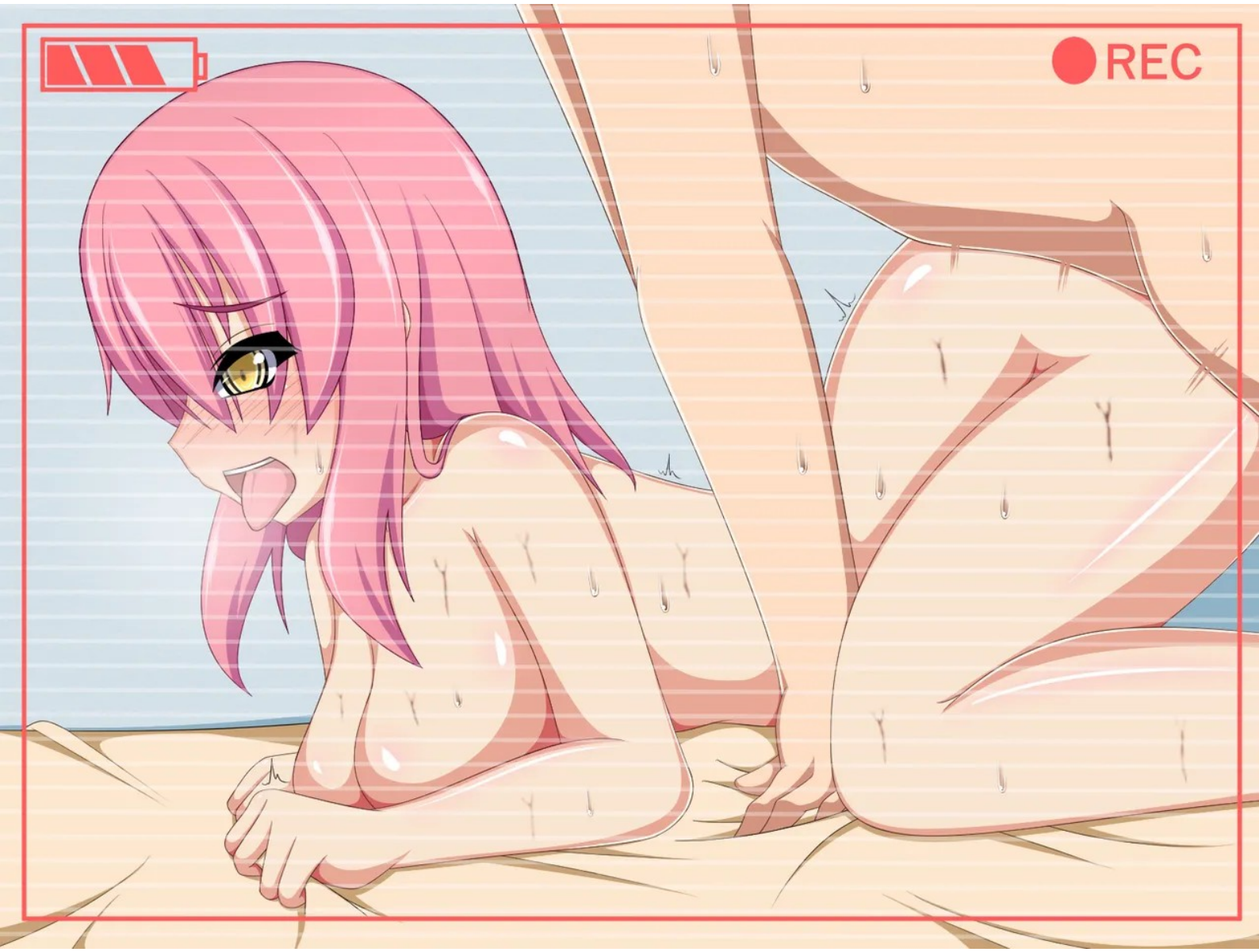


● REC



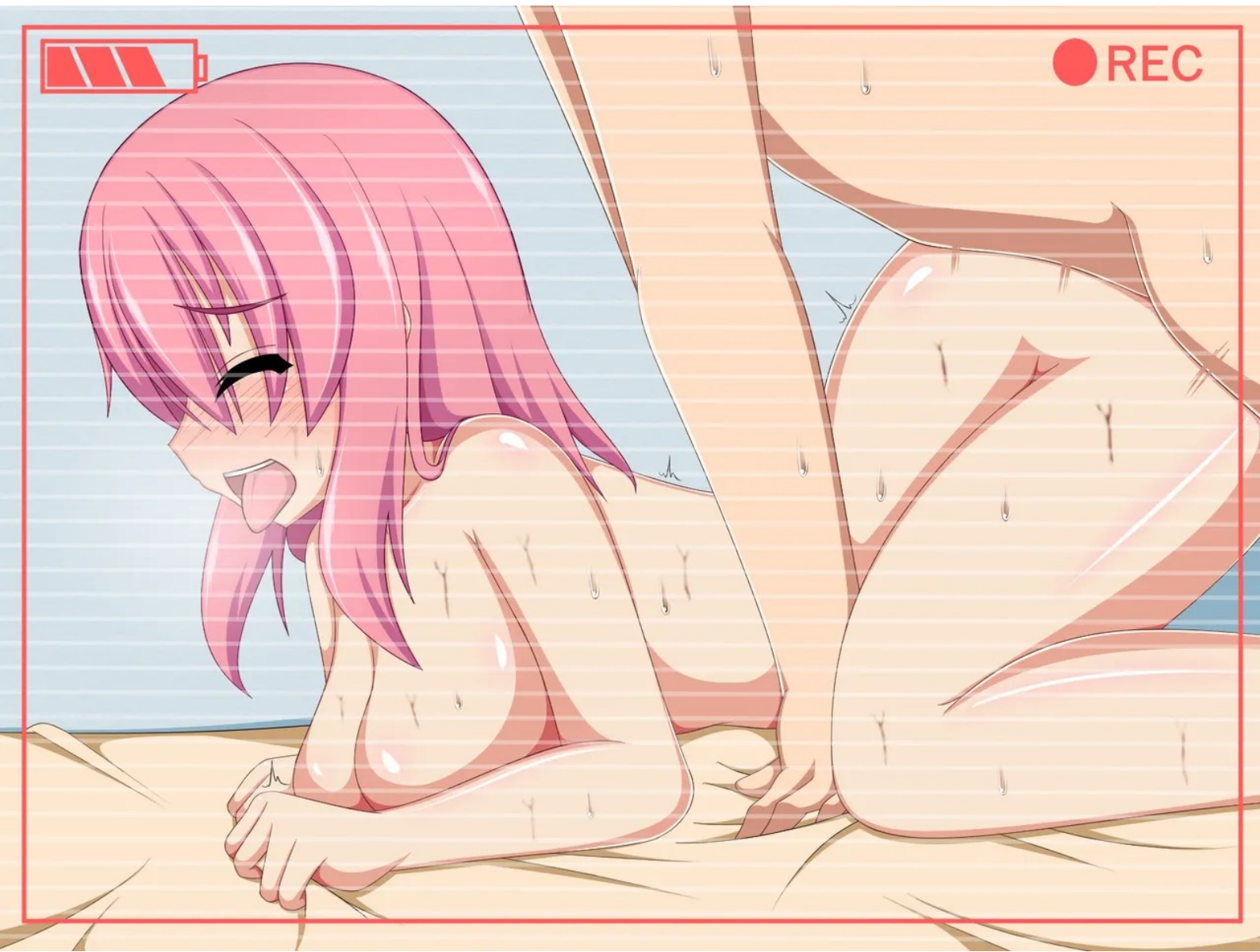


● REC



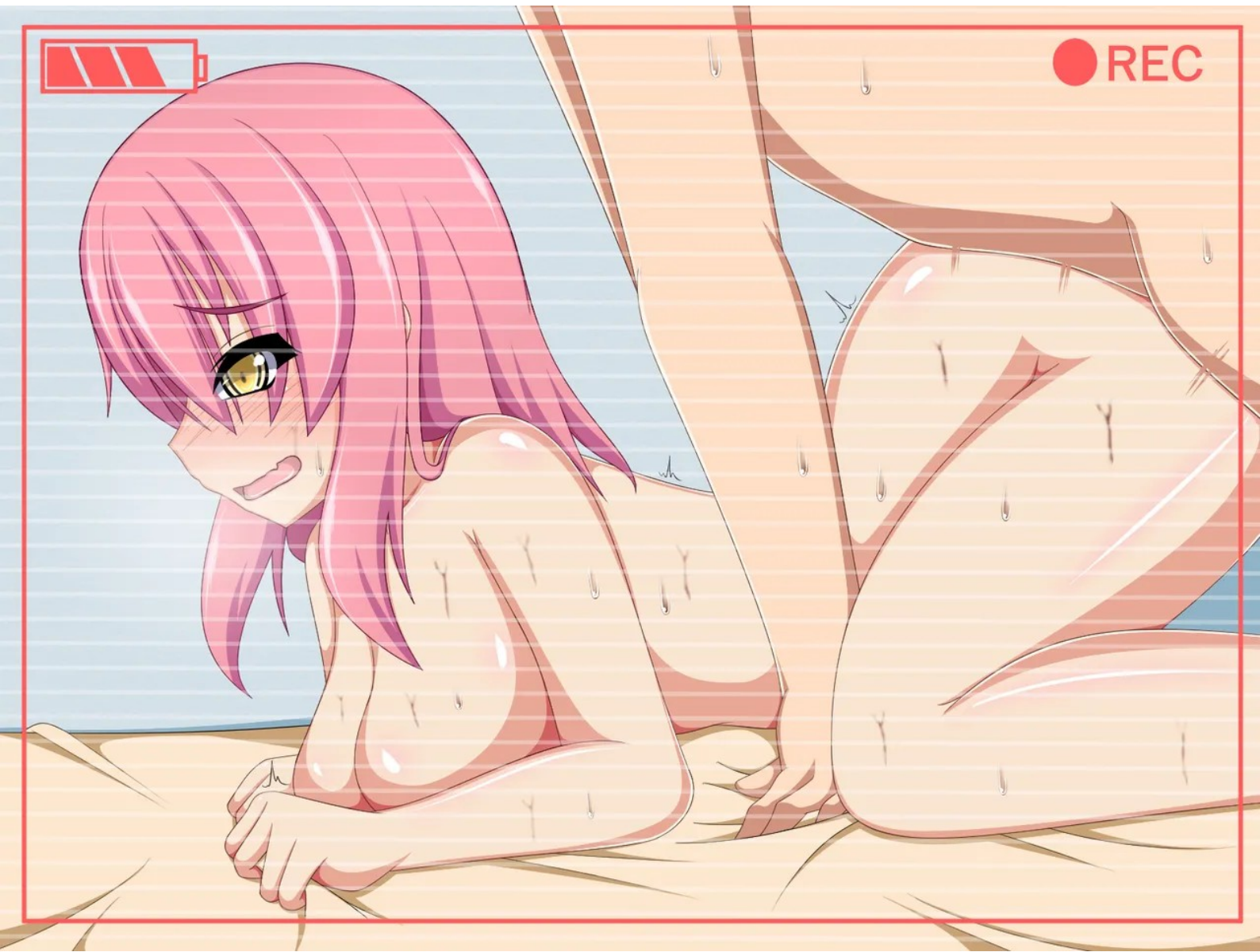


● REC



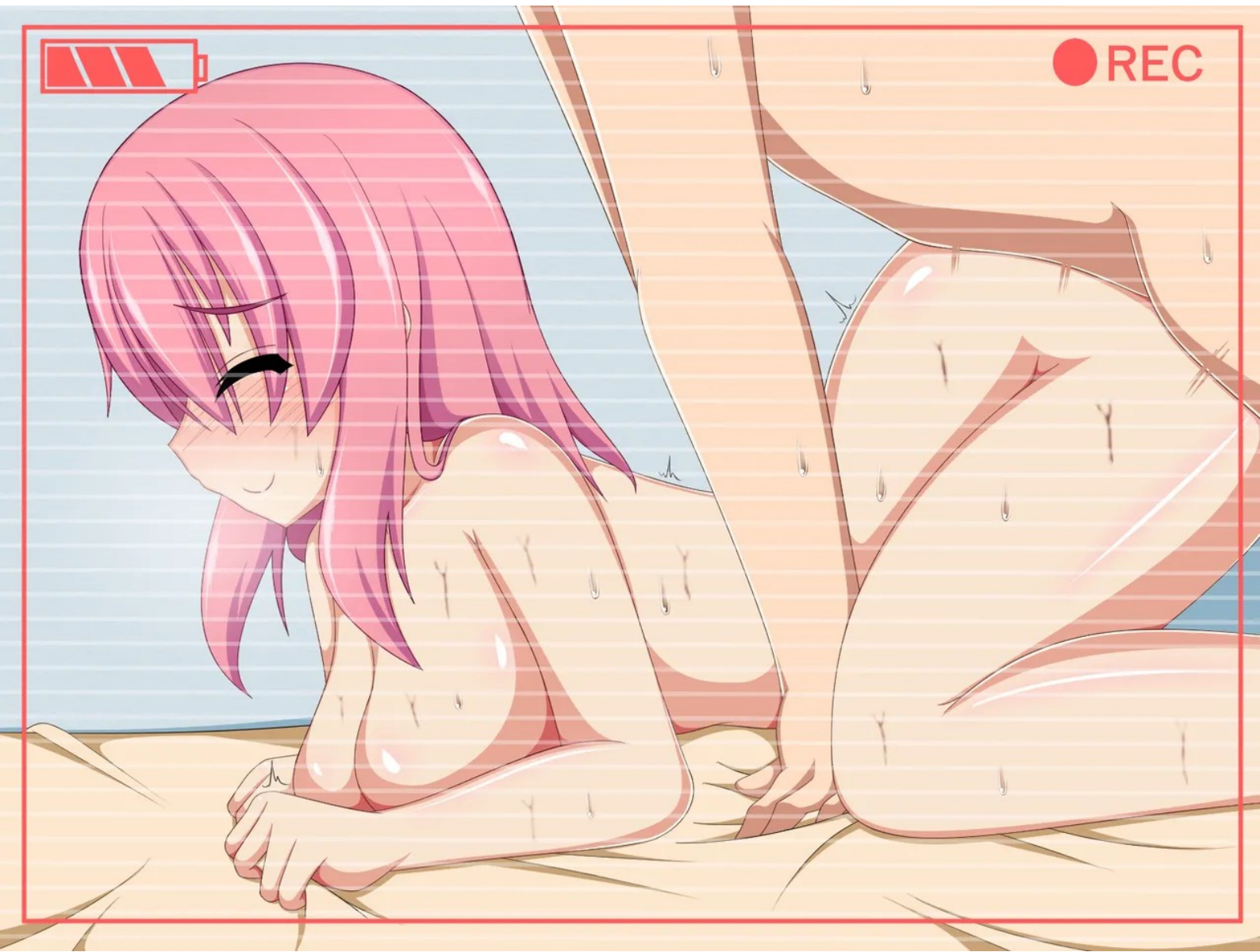


● REC





● REC





● REC

